

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

主論文の要旨

論文題目 張愛玲と戦時 —イメージの差異化—

氏名 陸 洋

論文内容の要旨

張愛玲の普遍性と差異を合わせもつ自己主張は同時代の人には奇人扱いされていた。彼女の文学における「新旧融合」も 1940 年代から批評界では繰り返し指摘されてきて、張愛玲文学を特徴づけている。本研究は「融合」に含まれる具体的な手続きを探究し、「旧」の素材と「新」の視点は張愛玲のテクストにおいてどのような過程を経て生かされるかを考察した。張愛玲のテクストにおいて、古いイメージが覆されたところに、どのような代替物が用いられるかを確認した。

本論は張愛玲の作品が出版された当時の一読者としての立場を設定して、自分の中に既に持っているイメージの原型が張愛玲文学における変型と出会うとき、衝突が発生したり、折り合いをつけたりする過程、また既存のイメージの意味を見直し、考え直す効果が生じることを余儀なくされると想定している。したがって新しいイメージとの出会いがもたらすインパクトと思考の更新によって、自分の固有観念が揺さぶられ、次いで世界を認識する仕方が変わっていくことの可能性を検討した。それによって、張愛玲によるイメージの修正は、彼女独自の時代のおよび個人的文脈のなかで、現実的状况と文学的関心の両面を考慮しながら、常に更新しなければならないというイメージ自身の内的需要に答えるかについても検討した。つまるところ張愛玲のイメージ破壊は、イメージ作りという認識論的な作業自体にどのような変化を迫るかを問ってみた。

本論文は七つの章に分かれて、張愛玲の戦争、植民地、セクシュアリティをメインテーマとして描いた小説もしくは散文を取り扱った。第二章では日本文化や日本人に言及される散文を対象として、戦時中張愛玲の異文化受容の態度、また受容から創作への転化の過程を把握してみた。散文は中国では近代以来、私人性を帯びてきたジャンルであり、1940 年代、張愛玲は散文の中でのみ、日本占領下の時勢について個人的な印象や感想を述べている。ましてや戦時下の上海では散文の執筆活動は女性知識人たちに公共で発言する機会を提供することになっていたため、張愛玲は散文において

ファッション、踊り、絵画を語るミクロの視点を通して、異文化間の比較、戦時体制、民族性などのマクロの論題へと押し広げることができる。本章はとどのつまり、張愛玲の異文化受容は戦時下という時代背景のもとでどのように条件づけられているか、もし戦争中異文化の間の相互関係においては拮抗が融合にまさるとしたら、彼女の日本文化の受容は中国人としてのアイデンティティにどのような脅威をもたらしたかを解き明かすことを目的としている。

第三章は小説「霸王別姫」と「傾城之恋」における京劇『霸王別姫』の引用を例にして、張愛玲の戦争を題材とする小説において京劇の要素が果たす役割を検討した。『霸王別姫』は1920-1940年代に人口に膾炙した京劇の演目である。女性が夫・主君に忠節を尽くして殉死するテーマは一見して時代遅れに見えるだろうが、舞台上の戦争の背景と現実には起きている日中戦争の時代状況が重なり合うところで、近代における女性が国家に対する責任が示唆されている。張愛玲の作品では、劇の筋に沿って物語を展開させる「霸王別姫」にせよ、戦争のイメージと京劇のシーンをメタファー化する「傾城之恋」にせよ、小説とそれが引用したプレテクストの関係は、プレテクストに内包されるメッセージをそのまま伝えるより、現実の文脈に照らしてイメージの意味を変えたり、約束事が現実状況に通じないことを露呈させることによってパロディ化したりする。こうして、小説は社交、恋愛の場面と戦争の場面を綯い交ぜにすることによって、日常的な文脈と非常時的な文脈が地続きすることを示すほか、戦争のイメージを家庭または恋愛に関する叙述に織り込ませる。一方、流蘇のイメージの変化を通して、イメージの形成がどのように外部的な視線や圧力と自己認識に影響されるかが見えてくるだろう。

第四章では従来悪評高いとされる「連環套」をオリエンタリズム的小説の系譜と引き比べ、コロニアルな状況を反映する作品として読み直しを試みた。「連環套」は、一見異質な文化背景の話をつぎはぎしただけのように見えるが、実はコロニアルな状況の下、香港という近代都市がコロニアルな危機に巻き込まれた様子を一人の女性の人生を通して照らし出している。寛喜の性と金銭が本位である男性関係、母性愛の薄い親子関係、またはアイデンティティが宙ぶらりんになっている共同体内の人間関係から、彼女をオリエンタリズム的小説にしきりに見られる東方女性の典型に反撥するようなコロニアルな現実を生きる女性として位置づけたい。したがって本章では寛喜が「蝶々夫人」などの戯画だというアプローチから、「連環套」では人物の造形及びプロットの展開にロマンや、センチメンタルな要素がいっさい切り捨てられていることの意味を考える。以上により、本作品において反他者化の試みがどうやってなされたのかを検討した。

第五章では張愛玲の日本映画受容が彼女の小説創作に与えた影響を明らかにしようとして、張愛玲の作品のメディア横断的な性質を突き止めようとした。張愛玲が日本のミュージカル映画の童話表現と身体表現を賞賛して、これらの表現は彼女が唯一通俗小説と認めた作品「多少恨」にも見られる。本章は「多少恨」と日本映画との比較を通して、張愛玲が映画の主旨や表現手法を小説に接ぎ木する際に、違うメディアに適合するよう何からの修正か変形を行ったのかを考察した。もう一つ、シンデレラ・ストーリーやメロドラマ性のような大衆向けの要素を小説で扱うとき、張愛玲は物語の

筋、人物の関係図、身体描写などにおいて、読者に典型との親近性を喚起させながら、人物の両義的な心理や、動機付けが困難なアクションを書くことによって、反省的な視点と社会批判的意識を加える、ということを論証した。

第六章は異なる時代における張愛玲の戦争経験に関する異なる書き方を対照し比較した。1944年に書いた散文「燼餘録」と1963年に脱稿した自伝的小説 *The Book of Change* では、張愛玲は1941-1942年に香港で経験した空襲、飢饉や陥落後の動乱から取材し、戦争を両方の中心部に据えて戦争経験を書き綴った。「燼餘録」では香港の一大学生という立場で戦時中の香港の状況を報告し、大学生の群像を描くことによって普遍的な人間性についての思考が巡らすのに対して、*The Book of Change* では語り手は大部分の時間に主人公と同一化または同感し、自ら生死ならびにセクシュアリティをめぐる様々な危機的な事件に遭遇するときの実感とそこから得た知恵を述べる。同じ素材を扱う張愛玲の前後の作品を見ると、彼女の創作における差異化とは、他人の作品に対するのみならず、本人が過去に書いたテキストに対しても成立できる概念であることを提出している。

第七章は小説「等」、『小団円』が京劇『紅鬃烈馬』と共通する時空間の表象の仕方と、戦争背景に置かれた女性人物の相違する態度について探究した。京劇『紅鬃烈馬』は戦争時に夫婦がやむを得ず離散する現実を描く。また妻が夫を待ちに待ったすえに一家団欒で報いられる結末をもって、観客、特に女性観客に未来の展望を約束してくれるゆえに、日中戦争のなかで話題作になっていた。しかし劇に込められたジェンダー・イデオロギーに対して、当時には懐疑の声も沸きあがっていた。張愛玲は劇で予想された男女関係が不自然だと主張する側に傾けるが、劇に表現された人物の時空間の制限を越える思いに、そこに描かれた団円の情景に一種の魅力を感じるのも確かである。彼女は理性のうえでは劇の原理を疑うにも関わらず、劇に引きつけられてやまないことは、「団円」の表象を自分の作品で変形させて繰り返し利用することで裏付けられている。そこで張愛玲の受容と創作の間の一つのジレンマ、伝統的文芸作品に含まれるジェンダー・イデオロギーを内面化する趨向と、虚構の幻想を追い払うために目下の現実を見詰めようとする姿勢の間のジレンマが垣間見られる。

第八章は張愛玲が中後期に創作した、第二次世界大戦の戦時中と終戦直後という時代性を前面に出す小説に書かれた性と暴力が絡み合う男女関係を分析の対象としている。人物の戦争についての認識と性愛についての認識がどのように通底し、似ているイメージで描写され、作者が感じ取る時代の運命と個人の運命の間の連帯性を表現しているかを考える。本章は引き続き現実とフィクションの関係を問い詰めようとした。プレテキストについて、性と暴力で特徴づけられた社会的事件が報道され、のちに文芸化された過程ではどこに注目すればよいかを考える。張愛玲の受容について、彼女がどのように事件に関する言説を受け取り、どのような心象風景を形成しえたかを問ってみた。最終的に、作者はトラウマ的な記憶を書き記すにあたり、どのように過去の出来事をフィクション化することによって心的傷害と対峙し、暗い経験を超克するかを考察した。総じて言えば、フィクションでは現実の結果を必ずしも覆すわけではないが、それと違う価値標準をもって現実の印象を変転することができる。暗殺計画を途中で放棄し、命を落とした女スパイは、自己犠牲的な愛情を貫き通すことで「勝

利」と「生存」の意味を問い直させることになる。そして現実の恋愛関係に傷つき失望した張愛玲本人は、かつて恋愛のときに経験する今一ここの感情や感覚を蘇らせ、そこから自分の存在意義を確認している。

1950年代以後に書かれた戦争を背景とする男女関係をめぐる小説では、第二次世界大戦の出来事が書かれているが、それによって反映されているのは、冷戦期の社会的雰囲気と時代的心理である。「色、恋」と『小団円』ともは張愛玲が嘗て経験し、もしくは見聞きした事件から取材しているが、創作にあたり、作者は事実に近寄ろうとするわけではなく、あくまでも読者を驚かせる「意外性」を重視する意図で歴史言説から斥けられた暗部、見落とされた細部に光を当てている。1950年代以後の張愛玲の戦争叙事は、戦時下の男女の性的交渉の描写と力関係の呈示をもって具体化される。エロスとタナトスの間で行き来する人物の心理的葛藤と精神的な重荷が冷戦時代の読者にも伝えうるゆえに、小説は虚構と現実の間を架橋し、戦争を過去のことではなく、恒常的、日常的な時間に滑り込ませて、我々が目下向き合っている課題として提出している。

ここまで、張愛玲のイメージの再生産の要素を明らかにしてきた。彼女は伝統的なイメージを継承するが、それは彼女が生きた時代の各段階における社会的、個人的状況と照合しつつ修正を入れた上での継承である。序章から持ち越してきた質問、張愛玲のこのような作業は、イメージ生産の系統について何か定まった構造とは違った性質を示唆するのかをもう一度考えると、張愛玲のイメージは、受容の源泉である原型イメージとの関係は受容背景によって大いに影響されること、また自らが誕生する際には既にテキストのなかの環境によって条件づけられていることを自己表明していることである。それは驚喜のような、違和感とグロテスク感を惹起してやまない造形でもある。彼女のような合理的に説明できないイメージは、かえってそれを成立させる不条理なコロニアル的家父長社会を特徴的に反射することになる。こうして張愛玲のイメージ作りの営為は、回帰的かつ自己反省的な過程である。新しいイメージは常に過去の文学伝統と連続しており、しかも特定の文脈に条件付けられ限定されていることについては無知であり、ステレオタイプ化に向かって突き進む一方のイメージ作りの前例とは違う。イメージは自分を生み出す時代背景、作者の個人状況、言説環境など相違する部分をもつ要素に絡め取られることを、心理や行動の矛盾、歴史と現実の混在や言葉と意味の乖離などを通して自己呈示している。